

授業「乳児保育Ⅱ」の模擬保育から学生が学んだこと

三好 年江^{*1)}・石橋 由美¹⁾

1) 幼児教育学科

(2005年11月9日受理)

本研究では、授業「乳児保育Ⅱ」における模擬保育による学生の学びの内容を明らかにすることを目的に、学生の感想レポートを分析した。その結果、学生は自分達の子ども理解の不十分さから子どもを理解することの大切さに気づき、保育者の関わりと援助について新しい問題意識を持つようになったことがわかった。また、第1回目模擬保育で子どもを理解することの必要性を感じた学生が、第2回模擬保育へ向けて学習意欲を高めたという点において十分評価できると考えられる。しかし、事後の「ふりかえり」が不十分であり、実践力に確実に繋げる場所までには至らなかったのではないかと考えられる。実践の「ふりかえり」は保育者の専門性の1つとしても掲げられているように、成長し続ける保育者として必要となる力量であり、実践力を育てる保育者養成の課題として十分検討される必要があると考えられる。

(キーワード) 模擬保育、実践力、ふりかえり、学生の学び

1 はじめに

改正児童福祉法の施行(平成15年11月29日)により、保育士が国家資格となった。さらに保育現場の保育ニーズも多様化し、保育の質と保育士の専門性の確保が重要な課題になっている。保育士の専門性として重要なのは、保育に関する専門的知識・理解と技能・実践力の統合である。また、低経済成長を反映して、子育てをしながら働く女性の増加は乳児保育の需要を高めてきており、保育学生の乳児保育に関する専門的知識・理解と技能・実践力の開発は、保育士養成校の責務である。

保育学生に実践力を育てる試みとして、授業のなかで保育士役になって食事の援助をしたり、絵本を読み聞かせたりなど、専門的知識・技能を実践的に練習する模擬保育が授業に取り入れられてきた。模擬保育とは、木内¹⁾によると、保育士養成課程にある学生や研修中の保育者が、保育の組立て方や援助法などを体験的に学んだり検討したりするために、実際の保育を想定した場で実践を

模して行う保育である。これは、実際の保育に備え、保育の実践力形成を図るものである。さらに、まとまった時間を使って、まとまりのある内容や活動を取り上げて指導計画を案出して実行し、子ども役からの評価や自己の省察、指導者からの批評を基に、達成できた点や問題点を自覚し、保育案の練り直しや実践スキル上の克服課題を点検する場合もある。

千葉ら²⁾は実習指導において、学生が立案した指導計画を基に園児と保育活動を展開する「模擬保育」を実践させ、学生が指導計画を立案する中で、子どもの様々な行動への観察力や洞察力の重要性と、幼児の発達段階に応じた保育活動の重要性を理解したと報告している。

そこで、筆者らは保育士養成課程の専門科目「保育の内容・方法の理解に関する科目」として本学が設置している「乳児保育Ⅱ」において、専門的知識・技能を実践力につなげるために、模擬保育を取り入れた。本研究では授業「乳児保育Ⅱ」における模擬保育による学生の学びの内容を明ら

*連絡先：三好年江 幼児教育学科 新見公立短期大学 718-8585 新見市西方1263-2

かにし、実践力を養う授業の内容・方法の改善のために資料を得ることを目的とする。

2 研究の方法

(1) 授業「乳児保育Ⅱ」の概要

乳児保育とは、0歳児（産休明け（57日）以降）、1歳児、2歳児を対象にした保育所保育（3歳未満児保育）のことである³⁾。授業「乳児保育Ⅱ」（演習：1単位、選択必修）は、保育士養成課程の「保育の内容・方法の理解に関する科目」で、2年次前期に開講されている。この科目に先行して、1年次に「乳児保育Ⅰ」（演習：2単位、必修）が1年間開講されている。

Ⅰ 授業期間：本研究の対象とした「乳児保育Ⅱ」の期間は2005年4月1日から8月5日までであった。

Ⅱ 授業の目的：3歳未満児保育の今日的課題を踏まえ、これからの乳児保育に求められる保育士の役割と資質について学ぶ。実践事例分析を通して乳児保育を具体的に理解する

Ⅲ 授業の内容と方法：授業担当者は本研究の執筆者2名である。授業の内容は、乳児保育の知識・理解を実践力に繋げるために、乳児のあそびを中心に模擬保育、実践事例分析、指導計画作成であった。第3・4・5回目の模擬保育、第6・7・8回目の乳児保育実践分析、第9・10・11回目の保育の計画はグループ・ワークを主として、模擬保育ではグループごとにクラス全体に発表をさせ、保育の計画はグループごとにポスター発表をさせた。発表後は全員で検討を行い、授業担当者も適宜質問と補足説明を行った。また、授業終了時には授業に対する感想、意見、質問等を担当教員に提出した。担当教員2名は授業終了後、学生の感想を基に本日の授業の反省を行い、次回の授業について検討を行った。質問への回答は、次回授業で行った。

(2) 模擬保育の方法

授業「乳児保育Ⅱ」で、以下のように模擬保育を実施した。

Ⅰ 受講学生：受講した学生は本学幼児教育学科2年生で、授業「乳児保育Ⅱ」の第3・4回目の2コマ（4月19日）と第5回目の1コマ（4月26日）

計3コマで「乳児の遊びとその環境構成1・2・3」の単元にて模擬保育を行った。1コマ90分の授業である。当日の出席者は4月19日が51名、4月26日が50名であった。

Ⅱ 模擬保育の方法：各グループで「手作りおもちゃ」を利用した遊びを計画して保育を行う。この「手作りおもちゃ」は1年次の授業「乳児保育Ⅰ」のまとめとして、春休みを利用し授業受講者が全員製作したものである。グループは0・1・2歳児ごとにそれぞれ3グループづくり、1グループ5人から6人とした。自分が製作したおもちゃの対象年齢を考え、所属するグループを自由に選択させた。その後各グループで配役（保育者・子ども）を決め、保育を行うにあたり必要と思う事項など話し合い、保育プランを作成する。

遊びの条件は、①室内であること、②手作りおもちゃを利用すること（おもちゃの選択は自由である）、③保育者の人数は基準を満たすことであった。1グループは1発表として、発表以外の学生は観察者となった。発表は質疑応答を含めて30分以内とした。まず各自、自分が作ったおもちゃの説明を行い、本日の遊びのテーマ（この遊びのおもしろさなど）を説明し、遊びの場を設定し模擬保育を実施させた。最後の10分間は学生間で質疑応答を行い、担当教員も適宜、質問や補足説明を行った。授業終了時には授業についての感想レポートを提出させた。

(3) 学生の学びについての分析方法

授業「乳児保育Ⅱ」における模擬保育によって学んだことについて、模擬保育を行った授業終了時に提出された学生の感想レポート2回分（4月19日、4月26日）を、学生の学びについてKJ法を使って分析した。また、分析にあたっては個人が特定できないよう配慮した。

3 分析の結果と考察

模擬保育についての感想レポートをKJ法にて分析したところ、以下の学びが見られた。

(1) 子ども役をすることで子ども理解の不十分

表1 模擬保育で「子ども理解の不十分さに気付いた」学生の人数と割合

	模擬保育実施者		観察者
	子ども役	保育者役	
1回目	24人中20人 (83%)	9人中4人 (44%)	18人中6人 (33%)
2回目	15人中4人 (26%)	3人中2人 (66%)	32人中1人 (3%)

さに気付いた

初めての模擬保育ということで、第1回目は51人中20人の学生が「模擬保育が難しかった」という感想をもった。この中でも模擬保育実施者（以下、「実施者」とする）は33人中15人（45%）、観察者は18人中5人（27%）と、実施者の方が模擬保育を難しかったと感じている（表1参照）。その理由については「子どもを理解していなかった」「子どもを想像しにくかった」という学生が大半を占め、子ども理解の不十分さが模擬保育の難しさに比例していることがわかる。

実施者の中でも子ども役になった学生は24人中20人（83%）が、保育者役については9人中4人（44%）の学生が「難しかった」と感じている。特に、子ども役になった学生は「模擬保育をしてみて1歳児のことが全然わかっていなかったことがわかった。」「保育される立場になって改めて、子どもの特徴を捉えることが大切だとわかった」などと、子ども役になることで改めて子どもを理解することの大切さを実感している。また、「はじめは恥ずかしい気持ちがあったが、おもちゃで遊んだり、他の子どもと関わるうちに少しずつ子どもの気持ちが分かり本当の子どもになった気分がした」や「言葉がしゃべれず保育者に上手く気持ちを伝えられなかったり、しっかり歩けなかったり…と、子ども役をやってみることで子どもの気持ちが分かったように思えた。だから保育者が子どものしぐさや気持ちを受け止め子どもを理解していくこと大切だとわかった」という記述がみられた。この学生達は、まだ、心身ともに未熟な乳児の役をすることで、自分の思いを伝えられない時の気持ちや、思うように動けない時の気持ちを実体験し、保育者が子どもの気持ちを受け止

めることがいかに大切かを学んでいる。さらに、多くの学生が「子どもを理解していないことがわかったのもっと勉強しなければならないと思った」と今後の学習に意欲をもったことがうかがわれた。以上のことから、模擬保育で子ども役になることは、子ども理解の必要性を実感するうえで大変有効であることがわかる。

このような経験は、第2回目の模擬保育に変化をもたらした。「発表する班の人達が、話し合いをしているところを見たが、何度も保育所保育指針を見て子どもの姿を想像していた」という記述からもわかるように、実施者は授業時間外で自主的な勉強会をもち、子ども理解に努めた。また、第2回目の観察者も第1回目模擬保育終了後の感想に「自分が2歳児になったつもりで次の授業には臨みたい」「模擬保育は思った以上に勉強になった。もっと事前の学習をしておくべきだった」「模擬保育をする時にはその年齢の事をよく知っておく必要がある」とあり、学生が体験を通し、子ども理解の必要性を身をもって感じたことから子どもについての予備学習ができていたことがうかがわれる。これらのことから、2回目は、学習の効果があらわれ、子ども理解の不十分さを挙げる学生の割合は、実施者の子ども役で15人中4人（26%）に減少している。観察者についても32人中1人のみで、観察した学生が「2歳児の事をよく捉えていて楽しかった」「現場でよく見かける光景だった」「保育が楽しかった」「2歳児らしかった」というように、模擬保育を実施した学生たちの子ども理解を評価し、さらに遊びの楽しさや保育者のふるまいに目を向けるように変化した。その上第2回の模擬保育では着眼点が保育者のふるまいに変化した（図1）。

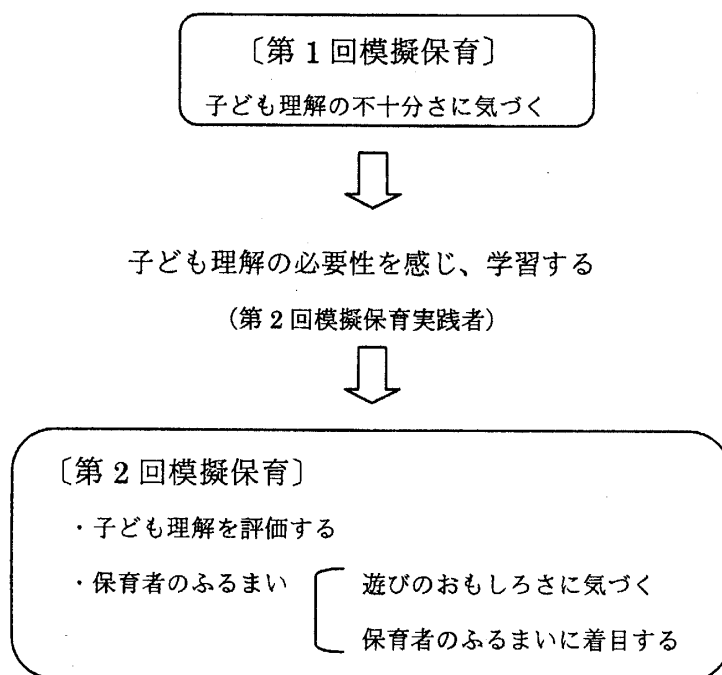


図1 模擬保育における学び：子ども理解から保育者のふるまいへ

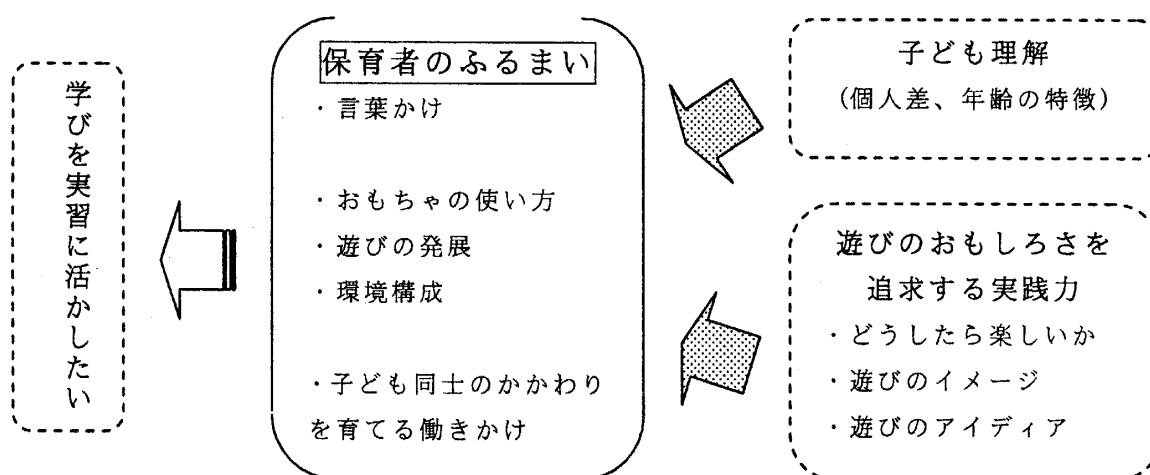


図2 第2回模擬保育における保育者のふるまいについての学び：保育者のふるまいを支える「子ども理解」と「遊びのおもしろさを追求する実践力」

(2) 保育者のふるまいについて学んだ

保育者のふるまいについて言及した学生は50人中33人(66%)であった。第1回の反省を活かし子ども理解に努めた学生は、第2回の模擬保育では、子どもに対する保育者のかかわりはどうなのだろうかという問題意識が生まれたようである。それも、子どもの立場に立った保育者のふるまいであり、さまざまな事柄をその視点でみていて、それが新たな気づきや学びに結びついている。

学生の感想レポートの記述は学びの内容について「言葉かけ」「おもちゃの使い方」「遊びの発展の仕方」「環境構成の方法」「子ども同士のかかわりを育てる働きかけ」に重複して分類された。(図2)

1) 言葉かけ

言葉かけに注目した学生は50人中12人(24%)であった。具体的には「子どもの姿を捉えていなければ言葉かけや適切な援助はできないとわかっ

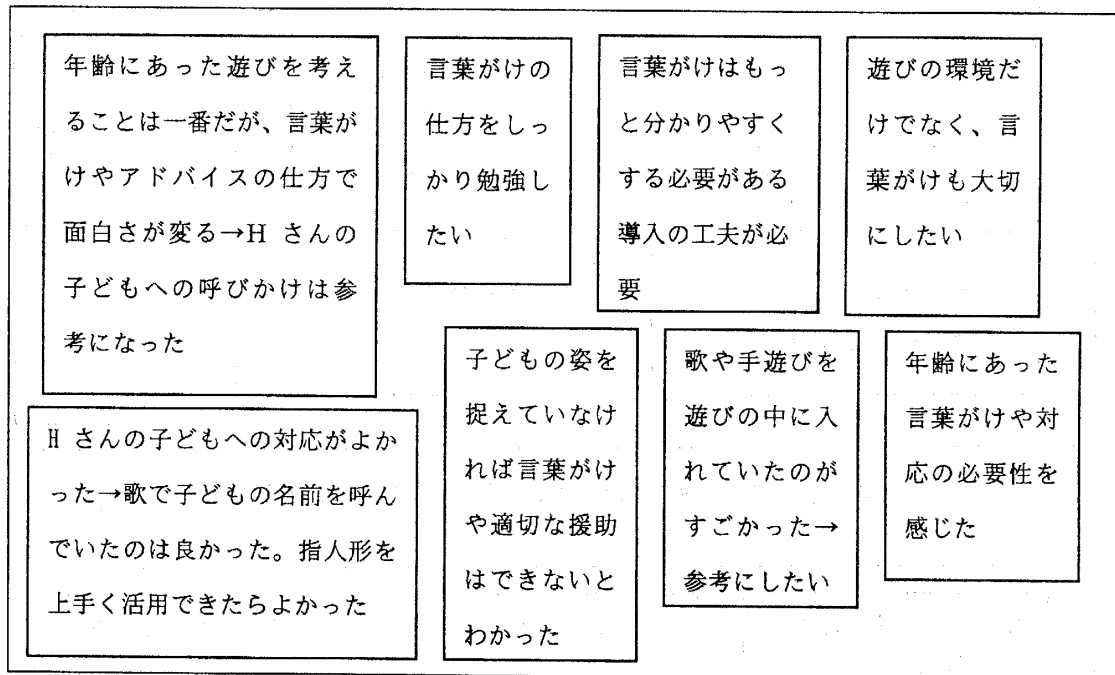


図3 第2回模擬保育での学び：個人差・年齢の特徴に配慮した言葉かけに関する記述例

た」「年齢にあった言葉かけや対応の必要性を感じた」という記述からわかるように、多くの学生が個人差・年齢の特徴に配慮する関わりが必要であると感じていることがわかる(図2, 図3参照)。しかし、これは模擬保育中のどの場面を捉えており、なぜそのように考えたのかということについて学生の記述の内容から読み取ることはできなかった。また、言葉かけの具体的な方法を学んだとして、「メロディーにのせて子どもの名前を呼ぶこと」で子どもの気を引き、「歌や手遊びを遊びの中に取り入れること」で楽しい雰囲気をつくっていた保育者の姿から、自分がやったことがない方法に感心するとともに、「実習に活かしたい」、「参考にしたい」と次の実習に結びつけていることが分かる。このように、具体的で効果がわかりやすい対応は、実践と結びつきやすいことが分かる。

次に保育者の言葉遣いに注目した学生から、「〇〇なヤツ…というような普段自分がなにげなく使っている言葉が出る怖さに気付いた」といい、子どものモデルとなるべき保育者として注意深く聞いてみると、不適切な表現があることに気づき、常に子どもの目を意識する必要があると感じてい

る。また、子どもへの言葉かけの中に子どもが理解しにくい難しい表現があり、「言葉遣いが難しかった。普段何気なく使っている言葉も意識する必要があることを知った」といい、「どのように子どもに伝えるか考える必要がある」とも述べている(図4参照)。このように、模擬保育は保育者を演じる学生の姿を通して、自己を振り返り、適切な言葉遣いについて考える契機になっている。

2) おもちゃの使い方

おもちゃの使い方に注目した学生は、50人中11人(22%)であった。手作りおもちゃの説明を受け、さまざまなおもちゃの工夫に驚き、「参考にしたい」「作ってみたい」と感想を持った。しかし、いざ遊びが始まって保育が展開される様子を見た学生は、おもちゃを活かした遊びという点で「せっかくのおもちゃが活かされていなかった」「作ったおもちゃをどのように活かすかが大切である」「使い方を考えて発展できるようにすべきだった」など感想を述べ、「実際1年生の実習の時も遊びに活かすという点で困惑した」と、実習を振り返りながら改めて遊ぶことの難しさを感じている(図5参照)。ここで、おもちゃは作ったが遊

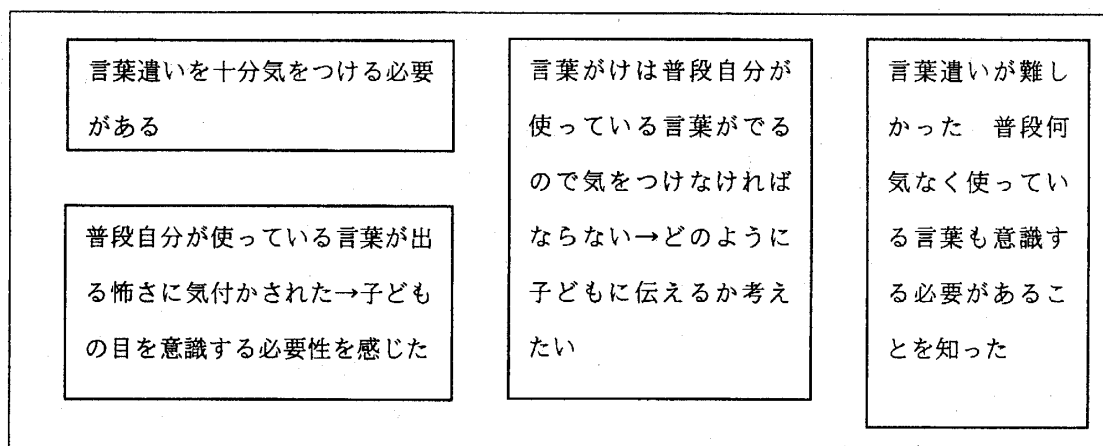


図4 第2回模擬保育での学び：自分の言葉遣いに関する記述例

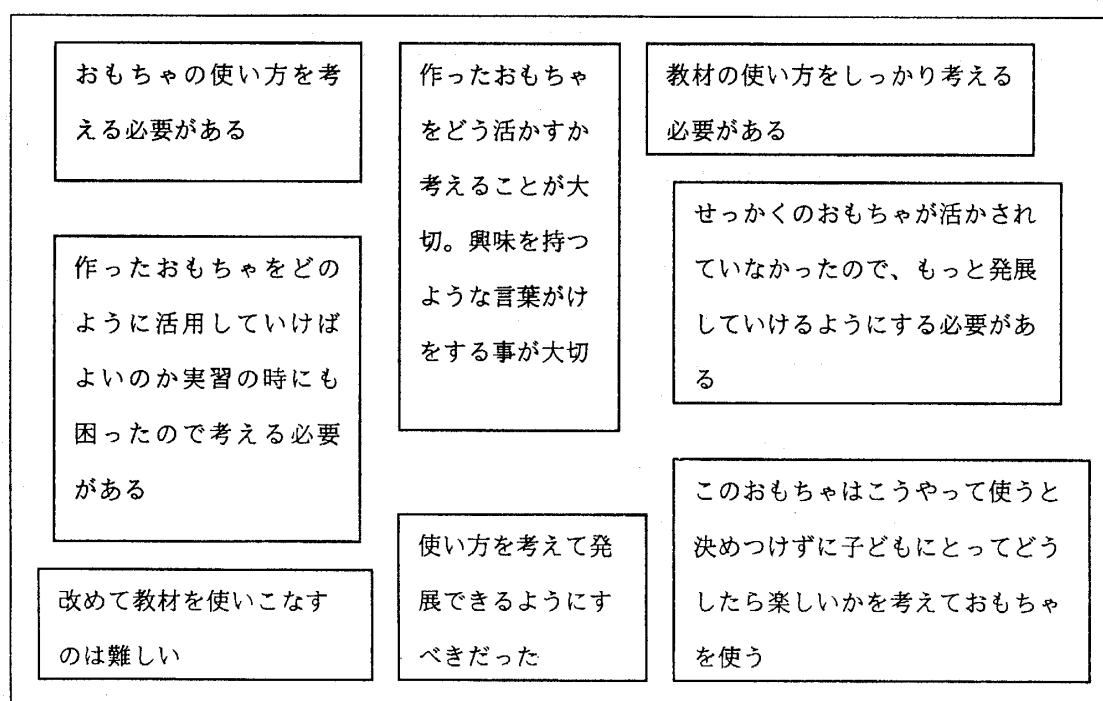


図5 第2回模擬保育での学び：おもちゃの使い方に関する記述例

びをイメージできない。遊べないという学生の実践力におけるつまずきが見られた。

数人の学生は「おもちゃを作る場合には、目的やどのような場面で使うのかなど考えることが大切だ」「子どもたちはどのように遊ぶか、どんなところが面白いと思うか想像しながら作ると工夫する点や、遊びの展開が頭に浮かんでくるのではないか」、制作の時点に立ち返り、目的を明確にもし遊び方についてもよく練られる必要があったのではないかと考察している。さらに、「遊びに

ついてもっと勉強する必要がある」「身の周りにあるものを遊びの視点で見えるようにしていきたい」など「おもちゃづくり」から「遊びの研究」へと目を向けていることがわかる（図6参照）。

3) 遊びの発展

遊びの発展に注目した学生は50人中8人（16%）であった。感想文の「子どもの遊びの姿をヒントに次の遊びへ発展させていくのは保育者次第」や「意図的な働きかけによって、そのおもちゃの楽しさが膨らんでいくことを学んだ」などの記述か

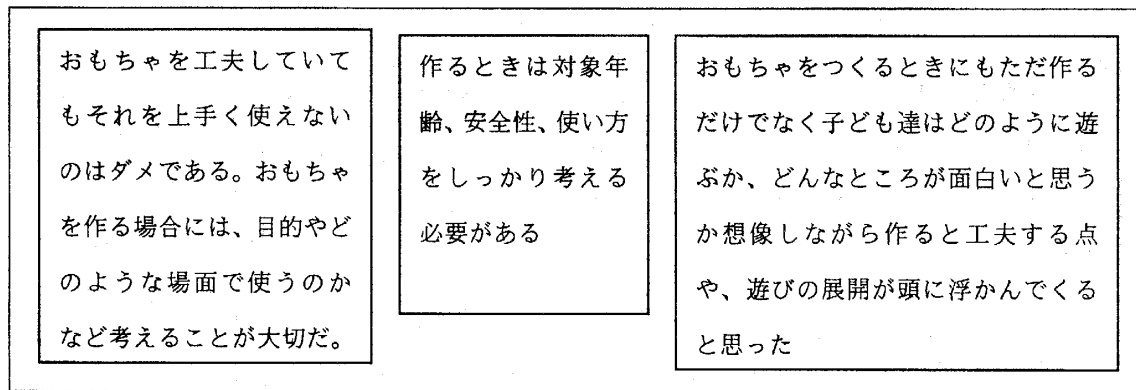


図6 第2回模擬保育での学び：使い方を考えたおもちゃづくりに関する記述例

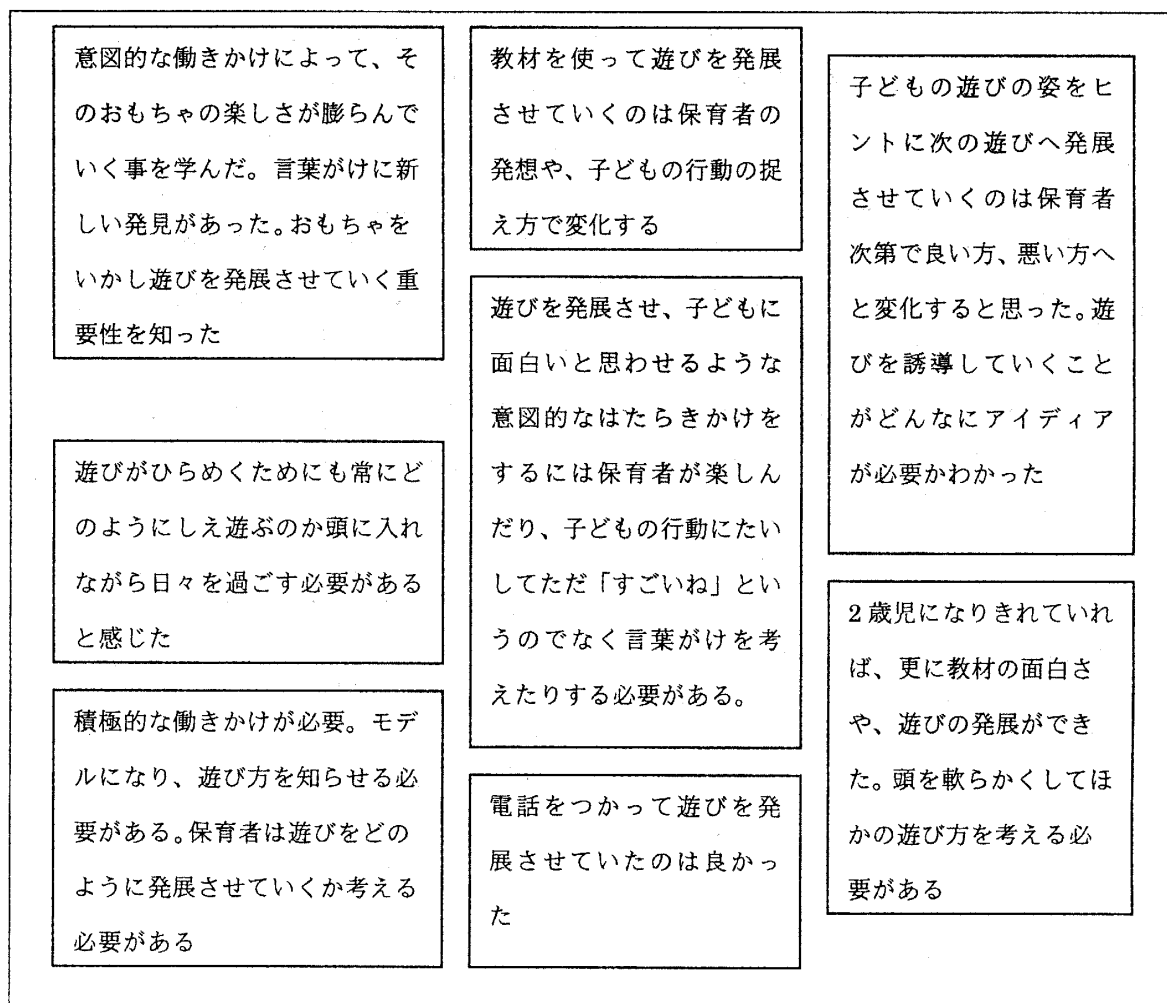


図7 第2回模擬保育での学び：遊びの発展に関する記述例

らもわかるように、子どもの姿を捉えながら、子どもが楽しいと感じるための保育者の働きかけがいかに大切かを学んでいる。さらに「頭を柔らかくして」や「遊びがひらめくために」というように、保育者の発想やアイディア、意図的な働きか

けがいかに子どもの遊びを左右するかということや、「子どもの遊びの姿をヒントに」や「子どもの行動を捉える」など目の前で展開される状況に瞬時に対応していく「いま、ここ」の実践力の必要性にも気づいている（図2,図7参照）。

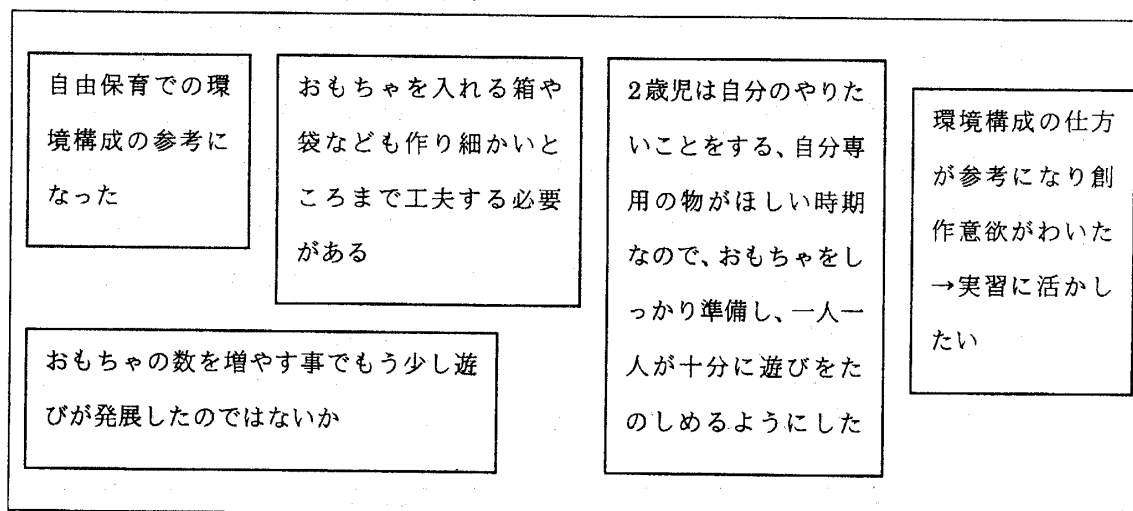


図8 第2回模擬保育での学び：環境構成に関する記述例

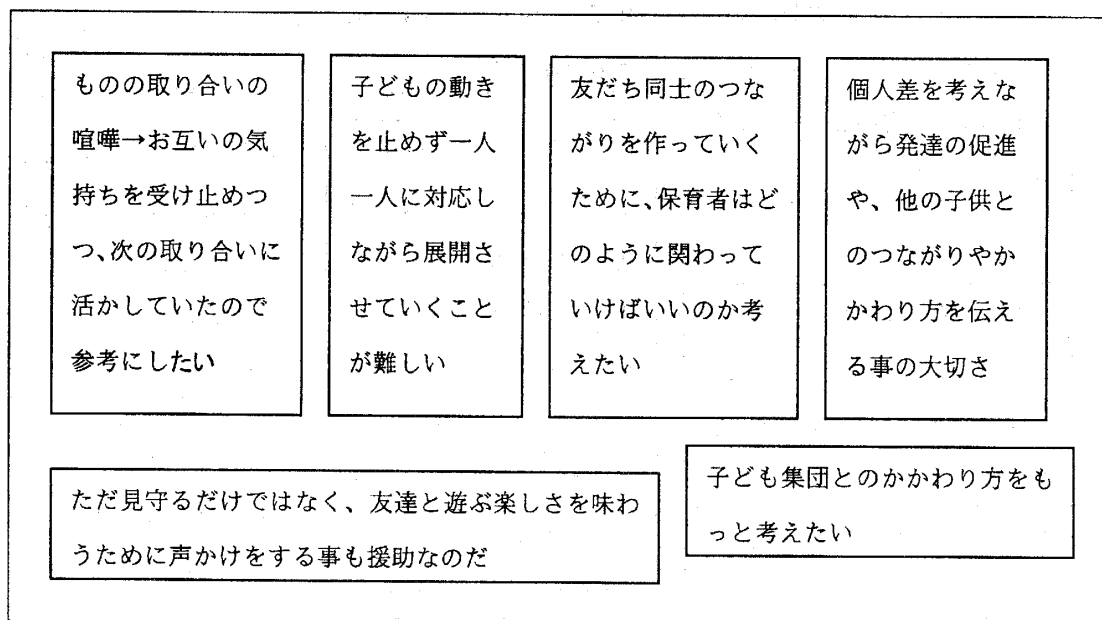


図9 第2回模擬保育での学び：子ども同士のかかわりを育てる働きかけに関する記述

ここに模擬保育を行う重要な意義があると考えられる。つまり、このような偶然におこる状況に対応して遊びを発展させる実践力の必要性を実体験することができる授業として、模擬保育は有用であると考えられる。しかし、今回の模擬保育では「いま、ここ」の実践力の必要性を全体で共有するところまでには至らなかったようである。また「大切である」ということに留まり、いかにその力を付けていくか検討しあうことはできなかった。つまり授業におけるふりかえりの学習が不十分であったと考える。

分であったと考える。

4) 環境構成

環境構成に注目した学生は50人中6人（12%）であった。ここでは、2歳児の発達の特徴を踏まえ一人一人が十分に遊ぶおもちゃの数や環境構成の工夫が必要であることを学んでいる。特に、模擬保育では、保育室の中の遊びの環境を自分達で構成するようにしていたため、「自由保育での環境構成が参考になった」といい、次の実習に活かしたいと実習と結び付けていた（図8参照）。

5) 子ども同士のかかわりを育てる働きかけ

子ども同士のかかわりを育てる働きかけについて記述している学生は50人中6人(12%)であった。模擬保育後の反省会では、子ども同士のかかわりを育てる保育者の働きかけに気づいた学生はみられなかったため、授業担当者が2歳児の発達の特徴や遊びについて補足説明を行った。それを取り入れて学生は「友だち同士のつながりをつくっていくために、保育者はどのように関わっていけばよいのか考えたい」「ただ見守るだけでなく、友だちと遊ぶ楽しさを味わうために声かけをすることも援助なのだ」と気づいたようである。(図9参照)

4 模擬保育授業の改善について今後の課題

写模擬保育による学生の学びを明らかにすることを目的に、学生の感想レポートを分析した結果、自分達の子どもの理解の不十分さ、子どもを理解することの大切さに気づき、そして保育者の関わりと援助について新しい問題意識を持つようになったことがうかがえた。

第1回模擬保育で、子どもの理解が足りないと気づいた学生は、次の授業までに予習を行ったり、子どもの理解の必要性を感じたりしていた。また、現在の学生の姿や発達の状態とは全く異なる子ども役を実体験することが、大人とは異なる子どもの視点に気づくことに繋がっていることがわかった。一方、おもちゃを使った遊びについては、学生はおもちゃを作ったものの実践に活かすことができない自己に気づくとともに、保育者の意図的な働きかけが子どもの遊びに重要な意味を持つということが理解できたと述べている。このように、今回の模擬保育の試みは、学生達に多くの「気づき」を促し、学習意欲を高めたという点においては十分評価できると考えられる。

ところで、鯨岡⁴⁾は保育者の専門性として、3つのポイントをあげている。1つは専門的な知識に支えられながら、保育を具体的に計画・立案する専門性、2つ目に実践場面において、受け入れ・認めつつ教え・導くというような両義的対応の専門性、3つ目に、立案された保育計画と実践の

結果について実践後に、子どもの様子を踏まえながら批判的、反省的に吟味し、評価する「ふりかえり」の専門性であると述べている。

今回の模擬保育では、とくに事後の「ふりかえり」が不十分であったと考えられる。模擬保育終了後、質疑応答の時間はあったものの10分弱という時間は短く、全体で1つの場面を取り上げてじっくり検討していくことはできなかった。したがって、多くが個々の反省に留まることになってしまった。今後は模擬保育での一人一人の貴重な「気づき」を、多くの学生の確実な学びや実践力に繋げていくことが課題であると考えられる。そのためには、保育中のどこで、何を感じたのか、また、何が見落とされていたのか、複数の目で、それぞれの立場(子ども・保育者・観察者)で見直し・省察される必要がある。このような「ふりかえり」は、自分一人では見えなかった問題点や改善点に気づくことができるとともに、腑に落ちる確実な学びや実践に繋がっていくものと考えられるからである。さらに、模擬保育をビデオで録画することで、全員が同じ場面を共有しながら意見を出し合い、自分自身の行為を客観的に「見つめ、見直す」ことができるなど、より高い学習効果が期待できると思われる。このような実践の「ふりかえり」は保育者の専門性の1つとしても掲げられているように、成長し続ける保育者として必要となる力量であり、実践力を育てる保育士養成の課題として十分検討される必要があると考えられる。

文献

- 1) 木内剛：模擬授業. 日本教育方法学会編『現代教育方法事典』, 図書文化社, 506, 2004
- 2) 千葉弘明, 松田広則, 河合規仁, 鈴木郁生, 時任真一郎：実習指導のあり方に関する研究. 全国保育士養成協議会第43回研究大会研究発表論文集(全国保育士養成協議会), 86-87, 2004
- 3) 待井和江：乳児保育の歩みとその背景. 待井和江・川原佐公(編)『乳児保育』, 東京書籍, 9-25, 1995
- 4) 鯨岡峻：保育者の専門性とはなにか. 発達

(ミネルヴァ書房), 83, 53-60, 2000

Learning through Simulating Care for Infants and Toddlers

Toshie MIYOSHI¹⁾, Yumi ISHIBASHI¹⁾

1) The Department of Early Childhood Education, Niimi College, 1263-2, Nishigata, Niimi 718-8585, Japan

Summary

In this article, we explored what students learned through participation in simulating care for infants and toddlers. The analysis of students' essays about the simulations showed that the students became more motivated to understand the children after noticing their insufficient understanding in the first simulation. In the second simulation, they became concerned with new problems about the quality of care for infants and toddlers as provided by the caregiver. In order to get students the practical ability moreover, we consider that they would need to reflect concretely after the simulations.

Key words: Simulating Childcare, Practical Ability, Reflection, Learning